



Title	自己意識的感情の社会生態学的基盤 : 関係流動性の役割 [全文の要約]
Author(s)	前田, 友吾
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(人間科学)
Dissertation Number	甲第15988号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92350
Type	doctoral thesis
File Information	Yugo_Maeda_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）

氏名： 前田 友吾

学位論文題名

自己意識的感情の社会生態学的基盤

—関係流動性の役割—

・本論文の観点と方法

本研究の目的は、異なる文化圏に住む人々の間で、他者の面前で成功した状況で経験する自己意識的感情—特に誇りと羞恥—に差がみられる原因を、社会生態心理学 (Socio-ecological psychology: Oishi & Graham, 2010; Oishi, 2014) の視点から明らかにすることである。先行研究では、西洋人は東アジア人より成功時に誇りを感じやすい一方、東アジア人は西洋人より羞恥を感じやすいことが示されてきた。本研究では、この文化差を生み出す社会環境要因として、関係流動性および社会的評判の獲得または回避に関する適応課題の違いに着目し、それらが人々の成功時の誇り感情と羞恥感情の感じやすさに影響するとの仮説を、日米比較研究を通じて検討した。

・本論文の内容

本論文は3部構成である。第1部では、研究の背景および本研究の理論仮説、そして検討課題を詳しく説明した。まず第1章では、本論文の背景として、自己意識的感情の定義とその認知的基盤について概説した後に、成功場面における自己意識的感情について文化差が見られてきたこと、そしてその文化差の説明のためにこれまで用いられてきた文化的自己観理論と、その理論による研究を概観し、これまでの成功時の自己意識的感情の文化差研究の限界点を述べた。他者からの自己に対する評価を認知したり、自己と他者との比較をしたときに経験される自己意識的感情には、文化差が見られることが示されてきた。特に、成功場面において西洋人は誇りを、東アジア人は羞恥を感じやすいことが示されてきた (Lewis et al., 2010; Stoeber et al., 2013)。これまでの文化心理学研究では文化的自己観 (e.g., Markus & Kitayama, 1991) という、それぞれの社会で歴史的に生まれ、継承されてきた自己の存在に関する共有信念によって、この文化差が説明されてきた。しかし、これらの説明には自己意識的感情の持つ適応的機能への注目と、他の心理に関する文化差研究の知見との一貫性の欠如という2つの問題を抱えていた。

続く第2章では、第1章で述べた先行研究の問題を解決するために、本研究で扱う社会生態心理学の視座と、注目する変数である関係流動性 (Yuki & Shug, 2012; 2020) を紹介し、これまでの関係流動性研究とその理論について説明を行った。社会生態心理学 (Socio-ecological psychology, e.g., Oishi & Graham, 2010) とは、自然環境や社会環境を人間の適応環境として捉え、心理・行動傾向を適応環境に対する適応方略として理解する視座である。本研究ではこの視座に則り、自己意識的感情の文化差を生む要因として、既存関係の維持・解消の自由度である関係流動性という社会生態学的変数に注目した。関係流動性の違いは各社会での適応課題の違いをもたらす。流動性の高い環境では望ましい対人関係の獲得・維持の競争が激しいため、ポジティブ評判の獲得が重要な適応課題である一方、対人関係が固定的な社会では既存の関係の悪化・排斥を避けるためネガティブ評判の回避が重要な適応課題であるという理論的想定を述べた。

第3章では、誇りと羞恥の適応機能と、関係流動性理論より本研究の中心的な仮説を導出した。表出と動機付けを通して、誇りはポジティブ評判獲得、羞恥はネガティブ評判回避という機能を持つと想定される。この機能と関係流動性による適応課題の違いを踏まえると、高関係流動性ではポジティブ評判を獲得する機能をもつ誇りが優勢となり、低関係流動性社会ではネガティブ評判を回避する機能をもつ羞恥が優勢となるという本研究の中心的仮説を導出した。

以上の議論を踏まえ、第2部では、第3章で提出した理論仮説を検証するために行った3つの実証研究についての詳細を説明した。本論文は、関係流動性が低いことが知られている日本と、関係

流動性が高いことが知られているアメリカの間で質問紙調査による比較研究を行なった。第4章では、成功状況での誇り・羞恥経験が先行研究と同様の文化差が見られるのか、またその文化差は、当該社会間の関係流動性の違いによって説明されるのかという本研究の仮説を検討した。研究の結果、成功状況での誇り経験は日本よりもアメリカで高く、その文化差は関係流動性によって媒介された(研究1-1)。また、研究1-2aでは、研究1-1にて測定した変数に加え、成功に対して周囲の人たちからどのような評判が寄せられるかについての期待の違いが成功時の誇り・羞恥経験に影響を与えるという仮説を検討した。その結果、社会的成功者に対して他者から報酬や賞賛が寄せられるだろうという成功賞信念は、アメリカ人は日本人より強かった。一方、社会的成功者に対して罰や批判が寄せられるだろうとの成功罰信念は、日本人の方がアメリカ人よりも強かった。さらに、成功場面羞恥の日米差は、関係流動性の低さと、それに伴う成功罰信念によって媒介された一方、成功場面誇りの日米差を、関係流動性の高さと成功賞信念によって説明する間接効果は有意傾向にとどまった(研究1-2a)。研究1-2bでは、以上の研究結果の再現性を確認するため再試を行なった。その結果、研究1-2aの結果の再現に加え、成功場面誇りの日米差を、関係流動性の高さと成功賞信念による有意な間接効果が得られ、本論文の仮説を支持する結果が得られた(研究1-2b)。

続く、第5章と第6章では、各社会において「適応的」であると本研究が想定した誇りと羞恥感情の経験が、その経験者に本当に高い適応度をもたらしているか、またその適応は、どのような社会的相互作用を通じて達成されているのかを検討するため、表出機能と動機付け機能に注目し検討を行った。第5章では特に表出機能に注目し、成功時の誇り・羞恥経験が各環境下において、誇り・羞恥を表出することが他者から好まれているのかを検討した。その結果、一貫して日本人よりもアメリカ人の方が誇り表出者を高く評価するという予測と一貫した結果が得られた一方で、羞恥表出に関しても日本よりもアメリカで評価が高いという予測と一貫しない結果が得られた。また、誇り表出者の評価に対する関係流動性の効果は一貫して有意な効果ではなく、羞恥表出者に関しては関係流動性が正の間接効果が得られたという予測と反する結果であった。また、表出者への効果に対する感情の種類と関係流動性の効果の交互作用効果は得られず、関係流動性が高いほど感情の種類によらず評価が高いという結果が得られた(研究2-1, 2-2)。

第6章では、成功時の誇り・羞恥感情が各環境下で適応的にはたらくメカニズムとして、動機付け機能に注目して検討を行った。その結果、関係流動性と誇り・羞恥感情の関連を成功獲得動機が媒介していた(研究3-1)。また、研究3-2では誇り・羞恥感情の動機付け機能をより明確に弁別するため、誇りの背後にある動機付けとして競争的成功動機、羞恥の背後にある動機付けとして規範的同調があると予測し、競争的成功動機、規範的同調動機が誇りと羞恥の文化差を説明しているかを検討した。その結果、予測と一貫して、関係流動性と競争的成功動機が誇りの文化差を説明し、関係流動性と規範的同調動機が羞恥の文化差を説明した(研究3-2)。

第3部では、以上の実証研究の結果を受けた、総合考察を行った。第7章では本研究の結果をまとめ、解釈を行った。第8章ではその結果を受けた上で、本研究の意義、限界と今後の展望を述べた。本研究は、少なくとも以下の2点の研究分野に対して理論的な貢献と1点の実社会への貢献がある。自己意識的感情の機能と社会生態学的環境の両面に注目して成功時の自己意識的感情に関する新奇な理論を構築し、同様の成功場面であっても、社会環境の性質に応じて適応的な感情が異なるという理論と、その実証的証拠を提出したという点で、感情研究に対する意義がある。また、自己意識的感情の文化差に関して社会生態心理学の視点から新規な仮説を提唱し検討することで、先行研究で見出された対人心理の文化差を統一的に理解することを可能にした点で、文化心理学に対する貢献がある。また、それらの理論的貢献にとどまらず、本論文は今後の実社会における介入や政策実行に関して、特に評価のフィードバックが重要であると考えられる教育・企業文脈において推進する教育政策及び教育実践に重要な示唆を与えるだろう。

その一方で、本研究には解決されていない重要な限界がいくつか残された。全ての研究が質問紙による場面想定法であったこと、研究2において予測していた誇り表出者と羞恥表出者の評価の差が見られなかったこと、本研究で用いた仮想的な場面が人前での成功状況に限定されていたこと、誇り・羞恥感情以外の自己意識的感情に対する見当の不足や、アメリカのデータの代表制の問題などといった限界点が挙げられた。

最後に本論文を踏まえた今後の展望として、適応行動と適応行動と生物学的メカニズムの検討の必要性、文化内における個人差の検討と適応戦略を身につける発達過程の検討という3つの方向性について述べた。